

一念多念文意の一考察

可西大秀

現に、大谷派本願寺に祕藏せられて居る、親鸞聖人の眞蹟と云ひ傳へられて居るものゝなかに、一念多念文意と題せられてある一部の典籍がある。外題も本文も同一の筆蹟であつて、寺傳の如くに、親鸞聖人の筆蹟であることは、確實であり、疑を差しはさむ餘地はない。その内容は、現時、眞宗教團に於いて、聖典として依用し、眞宗法要、及び眞宗假名聖教に、一念多念證文と題して、編入せられてある典籍と同一であつて、その文語に多少の出沒異點はあつても、表現されてある意義を異にするが如きものは發見せられない。言葉遣も同似であるが。唯だ、書寫年時を詮はす處の、奥書のみが異なつて居る。即ち、大谷派本願寺所藏本には、「康元二歲丁巳二月十七日、愚禿親鸞八十五歲書之」と記されており、他方には、「正嘉元年丁巳八月六日書寫之、愚禿親鸞八十五歲」と記されてある。たとひ、内容は差なくとも、典籍名と、奥書に記されてある書寫年時が、違つて居る場合は、異本のやうな感を懷くのであるが。現存せる刊寫の諸本の中には、此「正嘉元歲」の奥記があつて、外題は一念多念文意となつて居るものが二三ある。大谷大學所藏の慧空師傳寫の本書

の如きは、その一つである。——高田の顯智上人傳寫の本書も、亦た奥書は「正嘉」であつて、外題は一念多念文意とのことなるも、眼福を得ないから略す——されば、外題の名稱は異なつても、同本と見るべきである。今、此處に考察せんとする、一念多念文意は、前記のそれではなく、一念多念文意と云ふ外題及び内題を置き、撰號も奥書も明記して居らない、一典籍についてあるが、それが傳寫本は、河内願得寺に、實悟兼俊師の筆と稱せられるものが藏せられて居り、大谷大學には、一如上人の筆寫と稱せられて居るものを藏して居る。又慧空及び先啓が蒐集した、眞宗假名聖教の中に、此典籍が集められて居る。而して、寶曆五年には、京都書林錢屋庄兵衛から刊行して居り、古い時代には、眞宗教團の一部に於て、重要視せられた典籍であるやうである。故に、その所說の思想は、眞宗の教義を宣揚し、宗義上の證權たり得るものなるか否かを一應考察しやうと思ふのである。

此一念多念文意の内容は、結極、書題が詮顯して居るやうに、一念多念に關係する論釋の文を摘出して、それが表現する處の教意を検討し表明したものである。而して、その摘出せられた論釋の文と云ふのは、左記の諸文である。

(一)恒願一切臨終時勝緣勝境悉現前。(善導の往生禮讚)

(2) 諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心回向願生彼國卽得往生住不退轉(大經第十八願成就文)

(3) 其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一念當知此人爲得大利則是具足無上功德(大經附屬流通の文)

(4) 歡喜至一念皆當得生彼

(善導往生禮讚)

(5) 十聲一聲一念等定得往生

(6) 一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業順彼佛願故(善導散善義)

(7) 誓畢此生無有退轉唯以淨土爲期(同)

(8) 上盡一形至十念三念五念佛來迎直爲彌陀弘誓重致至凡夫念卽生(同法事讚下卷)

(9) 今信知彌陀本弘誓願及稱名號下至十聲一聲等定得往生乃至一念無有疑心(同往生禮讚)

(10) 若七日及一日下至十聲乃至一聲一念等必得往生(同)

而して、最後に「長樂寺隆寛律師一念多念の論をやすめんがために、かきあつめたまへる文の意を、無智の同行のひと、愚癡にしてこゝろえすとなけきまふすによりて、わづかにかきしるせり。論のこゝろを少々かきのせたり。さだめて、あしさまもこゝろえあるへし、ゆめ／＼うときひとにみすべからす」と結んである。此處に、「長樂寺隆寛律師一念多念の論をやすめんがために、かきあつめたまへる文」とは、何を指すか。それは、彼の隆寛の著、一念多念分別事であることは、それが内容を考察し、所詮の思想を考察する時に、容易に知られることである。卽ち、祖聖親鸞が建長

七歲四月に傳寫せられたと稱する、此分別事を見るに、始「念佛の行につきて、一念多念のあらそひ、このごろさかりにきこゆ、これはきはめたる大事なり、よくくつゝしむべし」との文語を記して後、一念多念何れに偏執するも、共に眞實教を正しく理解して居るものでないことを強調して、それが教證として、大無量壽經及び善導の著述から、教文を摘出し、それを以て論證してある。其教證は、曩に列記した、一念多念文意に摘出註解してある文語のそれである。されば、此一念多念文意と、隆寛の一念多念分別事とは、開顯する思想は、同一であるか然らざるかに付いては問題があるにしても、兩者關係のある典籍であり、叙述の形式から云へば、一念多念分別事の、一註釋書である。是れを從來、眞宗教團に於いて、聖典として依用して居る、一念多念文意（一念多念證文）と對照して見るに、彼にあつては、同じく、隆寛の著一念多念分別事に、教證として列ねた、經論の文を抄出し、それを註釋しつつ、一念多念の諍論を批判し、正しき斷案を提示したものであるが。その叙述形式に於いては、明確に章段を分け、「一念をひがごとくおもふまじき事」と標章して、一念に關する要文の意義を開顯し。「多念をひがごとくおもふまじき事」と標章して、多念に關する文語の意義を開顯して居るが。其處に解釋を施してある經論の文は、一念多念分別事に、教證としてあるものもあるが、然らざるものもある。即ち一念に關する文としては、

(1) 恒願一切臨終時勝緣勝境悉現前(善導禮讚)

(2) 諸有衆生(中略)即得往生住不退轉(大經、第十願成就文)

(3) 設我得佛(中略)不取正覺(大經、第十一願文)

(4) 若我成佛(中略)證大涅槃者不取菩提(如來會、第十一願文)

(5) 其有衆生(中略)無諸邪聚、及不定聚(大經、第十一願成就文)

(6) 次如彌勒云云(大經の文)

(7) 經曰、若人但聞彼國土(中略)安可思議(淨土論)

(8) 念佛衆生便同彌勒(龍舒淨土文)

(9) 若念佛者、當知此人、是人中分陀利華(觀經)

(10) 念佛者上々人(中略)最勝人(觀經、散善義)

(11) 但有專念阿彌陀佛(中略)現生護念增上緣(觀念法門)

(12) 我亦在彼攝取(中略)常照我身(往生要集)

(13) 其有得聞彼佛名號(中略)具足無上功德(大經、附屬流通分)

・此十三文のなか、(1)(2)(13)の三文のみが、一念多念分別事に、依用してある文語であつて、餘他のものは、何れも、著者祖聖親鸞が、添加せられた處のもので、前記三文が表現する思想の教證として挙げたもので、その意義を開顯して、一念往生思想の經論の上に於ける本據を示したもの

である。

次に多念に關する經論の文としては、左の文語を列ねて釋してある。

- (1) 乃至十念の語(大經、第十八願)
- (2) 一日乃至七日稱名號(阿彌陀經の意)
- (3) 設我得佛^(中略)稱我名者不取正覺^(大經、第十七願文)
- (4) 一心專念^(中略)順彼佛願故(觀經、散善義)
- (5) 上盡一形^(中略)致至凡夫念即生(善導、法事讚)
- (6) 如來所以興出於世^(中略)眞實之利(大經)
- (7) 觀佛本願力^(中略)功德大寶海(淨土論)
- (8) 今信知彌陀弘誓願及稱名號(善導、往生禮讚)

此八文のうちで、(4)(5)(8)の文語のみが、一念定得往生を開顯して居る章段と同じく、隆寛の分別事に、教證として列ねてある文語であるが。其他は祖聖親鸞が、添加せられた處である。それは、前記三文が表現する、多念往生の思想の本據を示し、更に教證をも摘出し、意義を明らかにして、多念往生思想も、經論の上に、本據あることを論證したものゝやうに思ふ。

されば、此處に考察せんとする一念多念文意は、其註釋に於いて、所釋の文語の表現する意義を

率直に示し、それに對する隆寛の見解、及びそれによつて隆寛の表現せんとする思想を、正しく、顯彰して居るか否かは別問題として、隆寛の一念多念分別事に、摘出してある經釋の文語、總べてに涉つて意義を開顯して居る點では、從來、眞宗教團に於いて、聖典として依用し、教學の證據として居る一念多念文意よりも、一念多念分別事の忠實なる註釋書とも觀られるのである。それは、此れが一念多念分別事にある教證の文語總べての意義を顯彰して居るに對して、彼れは、一念多念分別事の教證の文語のうち、主要なるもの五六を抄出して、その意義を示すに止まり、他に及ばず、實に幾多の經釋の明證を出し、其意義を示して、其處に開顯した思想の文獻的論據を提示し、一念往生、或は多念往生の何れかを偏執する思想を、批判すると共に、祖聖親鸞自からの見解を述べ、それが、全部の主眼であるやうな、敘述形式となつて居るからである。

斯様に、此處に考察せんとする一念多念文意は、隆寛の一念多念分別事と、密接なる關係の典籍であるが。その撰述者については異説あり、引いては、眞宗教團に於いて、如何に取扱はるべき典籍であるかについても問題にされて居たやうである。勿論、それは、眞宗教學興盛期頃のことである。大谷派の學匠、美濃の先啓は、此典籍の傳寫本の末尾に、左の如く記して、自身の見解を述べて居る。

斯書者、高祖之眞撰也。現行印本之證文、義正文廣。今此一卷亦祖師之撰述、云筆格、云義趣、無疑者也。小子先年、高祖之御舊跡巡詣之砌、於羽州書寫之、今更校正之訖

于時延享第四歲次丁卯夏梅天上浣第七日 西濃釋先啓

よつて、先啓の著淨土眞宗聖教目錄には、一念多念文意と標し、その下に「有異本俱眞撰」とあり眞宗龜鑑輯釋には、「一念多念文意有二本俱眞撰」と記してある。此處に、異本又は二本とある、その一本は、此處に言ふ一念多念文意であり、他の一本は、現今も眞宗教團で聖典として居る一念多念文意、即一念多念證文であることは、言ふまでもないことである。特に、そのことは、眞宗龜鑑輯釋に、引用してある文語が證明して居る。即ち、先啓は、一念多念文意に二種あり、何れも、祖聖親鸞の眞撰とするものである。而して、先啓の傳寫校訂の延享四年を後れること八年、寶曆五年に、京都書林から刊行した此一念多念文意には、越後の順崇は、附言を記して左の如く云ふて居る。

一、舊版一念多念文意と題するものは、即ち證文と同本なり。恐はこれ割闕氏、其別書なことをしらすして、一書に兩題を附て行ふならん。

一、此書は、一念多念分別事所引の文を釋し、證文は、自ら文を集め義を述べたまふの書也。故に、これを分別事に考るに、引文増減あり。此を以て、其御別選なること知へし。

一、此書と證文と、同文を釋したまふところは、其義必ずしも同じからず。また必ずしも異なら

す、側よりみれば嶺となり、横よりみれば峯となるがごとし。つふさに、此二書を對映せば、をのづから其妙境にいたるべし。

一、此書は、宗祖聖人の御作なること明著なり。然るに、其尊名を記せざるは、舊本に準するなり。

是れによつて、その刊行の由來と、順崇の此典籍に對する見解とが、ほぼ推察せられるのである。祖聖親鸞の眞撰として居ることは、先啓と同一である。

然るに、他の一方には、是れとは別の見解を持つて居るものもあつた。その一人は僧樸である。師は、その著述、眞宗法要藏外諸書管窺錄に、此典籍を批評して、左の如くに云ふて居る。

この書ゆゑしき贗物なり。大抵、高祖の製作、規模宏淵にして、本邦諸師のその匹あることなし。(中略)然に、此書を開するに、區々たる註脚、世の逐章句者の比ひなるところ多し。その文義前後貫通せず、きれ／＼なるところ多し、亦大義を謬たるところも見へたり云々。

而して、その表現する思想内容を珍味し、祖聖親鸞の眞撰でないことを力説し、北越所出として居る。此北越とは、北陸の邊境である佐渡、及び越後越中地方を指す語であらうと、想察するのである。法然在世時代に於ける、此地方に於ける、淨土教思想は、何んな傾向のものであつたかと云ふに、明確には解らないが承元三年己巳六月十九日附、源空の消息、遣北陸道書狀には左の如く記さ

れてある。

近日北陸道中有一誑法者、搆妄語云、法然上人七萬遍念佛、是只外方便也。內有實義人未知之、所謂、心知彌陀本願、身必往生極樂、淨土之業於是滿足、此上何過一念、雖一返重可唱名號哉、於彼上人禪房、門人等有二十人、談祕義之處、淺智之類者性鈍未悟、利根之輩僅有五人得此深法、我其一人、彼上人己心中之奧義也。容易不授之、擇器可令傳授云云(古本漢語灯第十中外本四十八頁)

是れに依れば、承元の頃に無稱深理の一念義計の思想が、北陸道地方に流布して居つたことが知られる。よつて、僧樸が北越所出と云ふたのは、此一念義を高調する一徒の著作とするものと推察するのである。玄智は、教典志の偽妄濫眞部に於いて、此一念多念文意の名を列ねて、偽稱宗祖作と云ふて居る。又超然の眞宗法要典據、及び琢成の關典錄^④には、何れも眞宗教團に聖典として依用して居る一念多念文意とは、文語や表現の義意に於いて、差異の點あることを指摘し、僧樸の説を襲用して、それに左袒して居る。履善の眞宗法要義概^⑤には、此一念多念文意のことに付いて述べ、存覺、性應寺一雄、光隆寺知空等の撰述にかゝる典籍目錄には、此典籍名が載せてないことを記し、更に増撲の説を襲用して後に、「先啓は今の文意をも、眞撰とせるとみゆ、撰眼なしと謂つべし」と云ふて居る。以てその見解は推察される。

註 ① 眞宗全書本三頁參照。

② 眞宗龜鑑輯釋乾口ノ三大谷法語ノ下參照。

③ 眞宗全書目錄部二二頁參照。

④ 眞宗法要典據卷二初參照。

⑤ 關典錄卷一二十一右參照。

⑥ 眞宗全書第四十五卷一九三頁參照。

斯様に、此一念多念文意について、眞宗教團に籍を有する學匠の間に異説があり。一は、祖聖親鸞の著述であつて、その思想は、眞宗教學の證權たるべきものであるとする。他は、是れと反對の見解を持ち、その顯彰する思想は、眞宗の一邪説であつて、決して祖聖親鸞の撰述でないとする。前説の代表は先啓順崇であり、後説の代表は僧樸履善であることは、上來所説によつて知られたことと思ふが。その何れの見解が、最も忠實に此典籍が詮顯する思想を、理解しての斷定であらうか。それを明確に決定することは、至難のことであるが。然し、此一念多念文意の内容を披見して、その顯彰する處の思想、及びその註釋語をとり、他の祖聖親鸞の著述に於ける思想、及び同似語の註釋語に、比較考察するに、先啓、順崇の見解は、果して正しいものであらうか、疑を起さざるを得ないのである。

かく云ふのは、文語は素朴であり、表現藝術が至つて拙劣であつて、祖聖親鸞の眞撰の典籍に比べて見劣があるからである。その一例を示すならば、左の如し。

(一念多念文意)

恒願はつねにといふこゝろなり。退すること轉することなきを恒といふなり。常にはあらず。常もつつねにと云ふ、ときとしてやまず、たえぬこゝろなり。願は臨終のときに、勝縁勝境ことごとく、まへに現せしめんとねがふて、そのことあひつかさるを願と云ふ。

又、文意を叙述して行くうちに、顯彰せられてある思想及び釋相に於いても、祖聖親鸞のそれと相違するものでなからうかと云ふ、疑惑を呼び起すものも、相當あるやうに思ふ。特に注意すべきものゝ、二三を抄出すれば、

(A) 大經十八願成就の文の、「乃至一念」の文語について、「乃至一念といふは、乃至は多のこゝろなり、本願をきつて、おほくもすくなくも、よろこふこゝろ一念もをこりてのち、一期のあひたたえすとなり」とある。然るに此乃至の語の言語學的意義は、暫く措くとして、祖聖親鸞では、「攝多

(一念多念證文)

恒はつねにといふ。願はねがふといふなり。いまつねにといふは、常の義にはあらず、常といふはつねなること、ひまなかれといふこゝろなり、ときとしてたえず、ところとしてへだてずきはぬを常といふなり。

少之言也」と解釋をなし、數及び量の定まらないことを表現するものとして居られるが常のことである。よつて、一念多念證文では、「乃至はおほきおもすくなきおも、ひさしきおも、ちかきおも、さきおも、のちおもみなかねおさむることばなり。一念といふは、信心をうるときのきわまりをあらわすことばなり」とも云ふてある。斯の如き意義が、此一念多念文意の「乃至」の語義を示す文語の上に、顯はれて居らない。

(B)無量壽經の願生彼國即得往生と云ふ語に對する此一念多念文意の註釋語と、他の典籍、即ち祖聖親鸞の眞撰と、確定せられて居る典籍の上に顯はれて居る、同一語の註釋語とを對照して見るに、その言葉遣と云ひ、表現思想と云ひ、類似の點もあるが大體に於いて兩者は別人の註釋語といふ、思ひを起さしめるものである。

(一念多念文意)

願生彼國といふは、願生はかの如來の衆生をして、本願無上の生をえしめんとおほす。すなはち、かの如來の欲生心なり。

彼國は、この穢國をすてゝ、か

⊙(一念多念證文)

願生彼國といふは、願生は、よろづの衆生、本願の報土へむまれむとねがへとなり。

彼國はかのくにといふ。安樂國

⊙(唯信鈔文意)

願生彼國はかのくにむまれんと、ねかへとなり。

の報土に生せんとなり。

即得往生といふは、即は日時を
へす、かならず、すみやかに
のくにゝいたるを得といふ。往
生は、行者のこゝろなり。

をおしへたまへるなり。

即得往生といふは、即はすなわ
ちといふ。ときをへす日おもへ
たてぬなり、また即はつくとい
ふ、そのくらゐにさたまりつく
といふことばなり、得はうへき
ことをえたりといふ、眞實信心
をうれば、すなわち無礙光佛の
御こゝろのうちに攝取して、す
てたまはざるなり。攝はおさめ
たまふ、取はむかへるとまう
すなり。おさめとりたまふとき、
すなわちとき日おもへたてず、
正定聚のくらゐにつきさたまる
を往生をうとはのたまへるなり

即得往生は、信心をうればすな
わち往生すといふ。すなわち往
生すといふは、不退轉に住する
をいふ。不退轉に住すといふは
すなわち正定聚のくらゐに、さ
たまると、のたまふ御のりなり。
これを即得往生とは、まふすな
り。即はすなわちといふ。すな
わちといふは、ときをへす、日
をへたてぬをいふなり。

註 ① 大谷派本願寺所藏祖聖の眞蹟本に依る。

註 ② 高田派専修寺所藏祖聖親鸞の眞蹟本、康元二歲正月二十七日の奥記ある本に依る。

(C)更に、此一念多念文意に於いて、吾人に不審を懷かしむる次の如き文語を見出すのである。

(イ)「至心は本願の名號を體とせり、名號は願心を體とせり、願心は信心を體とせり」とか、(ロ)「信心具足せざる名號は、善本徳本とはなれども、本弘誓願不可思議の信心にはあらず。誓願の信にあらずれば、眞實報土にいたることなし」といふやうな文語である。是れ等は、文語に脱落でもあるに因るか、その表現する意義は、捕捉し難いが、特に(イ)に於いての至心・願心・信心と云ふやうな用語は、祖聖親鸞の上に見出すことは出来るが、上記の如くに使用せられてある文例は少ないやうである。而して、信心正因の強調は、祖聖親鸞では、常のことではあるが、(ロ)の如くに、「不具信の名號は信心にはあらず」と云ふやうな表現は、祖聖親鸞眞撰の典籍の上には、見當らないやうである。又あるべき筈がないと考へるのである。

此處に抄出し、考察した文語は、勿論一念多念文意の一端語に過ぎない。故に、是等の文語が表現する思想及びその言葉遣をもつて、典籍批判の基礎として、推斷をなし、始終に涉り詳細に吟味することなくして其典籍の表現思想の系統や價值を決定することは、獨斷と偏見とに落ち入る危険

を伴ふ場合がないとは斷言せられないが、然し、前記の文語は、抄出とは云へども、多くを抄する煩を避けたため、特に代表的の部分を出したものであつて、此處に抄出しなかつた部分には、抄出文語の表現思想及びそれに類似の言葉遣がないと言ふことを表はすのではない。よつて、今の場合、前抄出の文語の考察を以て、推斷を全部に及ぼしその見解に基づいて此一念多念文意は、思想的に、祖聖親鸞の系統に屬すべきものでなく、又、その眞撰とも云はれないと推斷しても差支ないと考へるのである。

特に、此一念多念文意が持つて居る思想については、僧樸は、北越に流布して居た、眞宗の邪義に屬すべきものとの見解のやうであり。[㊦]了祥は、誓願と名號とを別執して、名號よりの信心を嫌ふ所謂、誓名不同計の思想が、多分に開顯せられてあるとの見解である。而して、祖聖親鸞の著述及傳寫せられた典籍には、多くの場合、その典籍の擗筆歲次を明確に記されてある。尤も教行信證の如き例外もあるが。此形式は、祖聖親鸞の著述の一格式であると言ふても差支ないと思ふのである。例せば、一念多念證文（一念多念文意）の卷尾に、

一本には、[㊦]康元二歲丁巳二月十七日 愚禿親鸞^{八十歲}書之

一本には、[㊦]正嘉元歲丁巳八月六日書寫之 愚禿親鸞^{八十歲}

とあり。唯信鈔文意の卷尾に

⑦ 一本には、建長二歲庚戌十月十六日 愚禿親鸞^{八十歲}書之

⑥ 一本には、康元二歲、正月廿七日 愚禿親鸞^{八十歲}書寫之

⑤ 一本には、正嘉元歲丁巳八月十九日 愚禿親鸞^{八十五歲}書之

とあるが如きである。然るに、此一念多念文意では、斯様な歲次も記されず、撰號もないことは、曩に記した如くで、言はゞ、祖聖親鸞の著述の形式を具備して居らないのである。こうしたことも亦た、此典籍を批判し、その撰述者を考察する指針となり、結極、前記の結論を裏書するものと思ふのである。已上、忽々の執筆故獨斷や、粗漏の多いことと思ふ、先輩の御指教を得ば幸の至である。

註 ① 僧樸が此書を北越所出とする思想から推察したのである。

② 了祥が、その著異義集卷一(眞宗大系本四八頁)に此一念多念文意の一節を抄出して居るに依る。

③ 大谷派本願寺所藏祖聖親鸞眞蹟本、一念多念文意と題する典籍。

④ 眞宗法要及び眞宗法要眞宗假名聖教編入本。

⑤ 奥州南部本誓寺所藏本。

⑥ 伊勢高田、高田派專修寺所藏祖聖親鸞眞蹟本。

⑦ 前橋妙安寺所藏本、眞宗法要、眞宗假名聖教編入本も同一。